

さらに本章では、病院や診療所、医師が戦闘や政府の弾圧の標的となったことでシリアの高度な医療システムが崩壊し、その結果としてポリオや結核といった様々な伝染病が蔓延することとなった経緯が、事例を用いつつ論じられている。医療システムの崩壊は人々の強制移動を招き、難民となった人々によってシリア国内の伝染病が国境を越えて難民キャンプや受入社会に持ち込まれることとなり、新たな保健医療上の問題を引き起こしている」と著者は主張する。

第5章は、難民の避難先であるシリア近隣諸国とEU諸国に視点を移し、難民受入社会のシリア難民問題への対応と公衆衛生をとりまく現状について論じている。とりわけ著者はトルコ、レバノン、ヨルダンの難民政策を取り上げており、これらシリア難民の主要受入国において医療インフラが圧迫されており、多くの疾病のリスクが高まっていることを指摘する。さらに難民の一部は、シリア近隣諸国からEU諸国へと移動しており、伝染病の潜在的なリスクなどがヨーロッパへと波及しているものの、こうした公衆衛生インフラの問題に対する関心は十分ではないと著者は述べる。

最終章では、ヨーロッパがこれらの公衆衛生上の懸念に対応するための著者による政策提言が述べられている。第3章で取り上げた疾病リスクを評価するための概念枠組みの活用や、国境での予防接種と医療施設の設立、避難民を対象とした臨時あるいは移動式診療所の設立、プライマリーケアの推進など多角的な観点からの提言が行われているが、最も興味深いのは医療の専門知識を持つ避難民を受入国内で雇用し、有用な人材として活用していくべきという主張である。著者によれば、こうした人材は受入社会の医療従事者不足の問題を解決するばかりか、シリア国内の病気に精通している上に患者である難民とのコミュニケーションが容易であるという利点を持っているという。上記の内容をまとめて、著者はシリア内戦によって引き起こされた深刻な疾病の再発生から難民たち自身と受入社会の人々を保護することが必要であると結論付けている。

以上、各章の内容を概観したように、本書は戦闘の中で医療システムを意図的に破壊するという戦術がとられたシリア内戦の特徴に着目し、その結果公衆衛生上のリスクが難民に付随して国際社会に拡散していることを指摘した点に大きな意義がある。さらに本書は随所に著者による政策への提言がちりばめられている。早急な解決が求められる難民問題において、アカデミックな議論と難民支援の実務の接続は研究者と実務家の双方にとっての重要な課題である。本書における著者の積極的な政策提言は、難民問題を対象とする研究面と実務面を架橋するための挑戦的な試みであると言えるだろう。

一方、本書の全体的な議論の進め方はやや性急な部分がある。とりわけ評者が気になった点は、第4章でのシリアの事例の記述がシリアの一般的な政治史の記述が中心で、シリア国内の医療インフラがどういったものであり、どのような歴史的背景を持っているのかについての議論が不足している点である。さらに、内戦以前のシリアは伝統的にパレスチナ難民やイラク難民を受け入れる難民受入国であったことを踏まえると、シリア内戦の発生以前から他の中東諸国からの難民の流入がシリアの医療インフラにある程度の打撃を与えていたのではないかという疑問が残る。また本書のタイトルを鑑みれば、第5章においてEU諸国における難民流入に伴う公衆衛生の問題とその対応についての記述が不足していることも本書の惜しまれる点だろう。

本書はシリアを中心とする中東地域研究の視座に立ち、強制移動と医療の関係というこれまであまり議論されてこなかったシリア難民問題の重要な一面を論じた点において有意義であり、中東地域研究者のみならず、難民問題に関心を持つ研究者、実務者に是非一読をお勧めしたい。

(望月 葵 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

小笠原弘幸(編)『トルコ共和国 国民の創成とその変容——アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会 2019年 iii+296+ix頁

トルコ共和国は今最も世間の注目を集めている国の一つと言っていいだろう。2017年に議院内閣制から大統領制へ移行する憲法改正が成り、翌年には大統領選挙が行われ、激戦の末、現職のエルドアン大統領が当選し、権力集中体制が整った。このようにわずか2年振り返るだけでも著しい変貌を遂げている。我が国

との関連で見てみると2019年は「日本におけるトルコ文化年」にあたり、各種イベントが行われている¹⁾。そんなトルコであるが、いったいこの国／国民はどのような過程を経て「トルコ／トルコ人」に成ったのだろうか。そのような問いに答える書として出版されたのが本書である。

本書は、編者の小笠原を中心とした若手から中堅の研究者の論考集であり、多様な観点からトルコの国家／国民形成の過程が描写されている。章立て及び担当執筆者は以下の通りである。

序 章 「アタテュルクのトルコ」を問い直す

——共和国史をめぐる研究潮流と本書の射程 (小笠原弘幸)

第一部 アタテュルクの描いたトルコ国民像とその創成

第一章 国民史の創成——トルコ史テーゼとその後 (小笠原弘幸)

第二章 国民創出イベントとしての文字革命 (穂山祐子)

第三章 感性を「統合」する

——国民音楽からトルコ民俗音楽へ (濱崎友絵)

第四章 国父のページェント

——ムスタファ・ケマルと共和国初期アンカラの儀礼空間 (川本智史)

第二部 トルコ国民像をめぐるネゴシエーション

第五章 アタテュルク後の宗教教育政策——ライクリキの転換点 (上野愛実)

第六章 国民国家トルコとアナトリアの諸文明

——イスラム化以前の遺跡をめぐる文化政策 (田中英資)

第七章 トルコにおける抵抗文化

——ハンスト・キャンペーンからみる国家・社会関係 (柿崎正樹)

第三部 交雑する空間のなかのトルコ国民——国境、移民・難民、隣国からの眼差し

第八章 トルコ共和国の境界——領域紛争と国境 (沖祐太郎)

第九章 トルコの移民・難民政策 (今井宏平)

第一〇章 イラクからみるトルコ——世論調査の計量分析から (山尾 大)

終 章 激動の五年間(二〇一三～一八年)と大統領制の始まり (今井宏平)

序章(小笠原)では、「権威主義的な政治体制・政治文化」への批判と「オスマン帝国からの政治的・社会的連続性」の指摘という二つの研究潮流を概説した上で、本書の目的(三部構成の狙いと論考の配置理由)が述べられている。第一部(第一～四章)ではアタテュルクの威光が大きかった時代(1923年～1930年代)に焦点を当て、国家が国民をどのように創成しようとしたかに関する論考で統一されている。第二部(第五～七章)では、そうしたアタテュルク時代の狙いが、その後どのように受容(反発を含む)され、変容していったかに関する論考でまとまっている。第三部(第八～十章)では、これまでの2部と違い、外部的要素でトルコを反射させることでトルコ／トルコ人の輪郭を描こうとした論考が集められている。終章を除いた全論考に概ね共通することとして、現在のトルコを直接的に考察するのではなく、アタテュルク時代をはじめとした過去を見ていき、なぜエルドアンを中心としたイスラームと親和性の高いAKPによる政権の長期化という現状に至ったのかを考える契機とすることが目的となっている。そして、これらの論考はそれまでの研究成果を再構築したもので、トルコの国家／国民形成に関心のある学生等にとって足がかりとなることを狙いとしている。

第一章(小笠原)では、「トルコ史テーゼ」と呼ばれる建国直後の国家が掲げた歴史叙述の型の生成過程とその後について述べられている。「トルコ史テーゼ」の内容はトルコ民族の優位性を喧伝することに重きが置かれ、当時の学問的水準で判断したとしても学術的といえるものではなかった。その一方で、このテーゼ

1) 例えば、「トルコ至宝展」(国立新美術館、京都国立近代美術館)が挙げられる。(<<https://turkey2019.exhn.jp/>> 2019年4月26日閲覧)

のブラッシュアップを図るために度々議論の場を設ける中で、歴史学の作法に則った研究業績をあげる流れも並行して生まれていた。すなわちテーゼが現在にまで繋がるトルコにおける歴史学の土台形成に貢献した一面もあることを指摘する。最後に、テーゼの衰退と現状について概観し、本章を閉じている。

第二章(槐山)では、1928年に行われたトルコ語のアラビア文字からラテン文字表記への変更について述べられている。オスマン朝時代末期から、合理性などの観点から文字改革を唱える論者もいたが、トルコ建国後、「脱亜入欧」が目指されたことで現実味を帯び、実行に移された。ラテン文字の浸透を図るため、政府は普及活動を迅速に行ったが、その内容は厳格なものではなく、実際上の浸透には時間がかかった。その一方で、文字改革をアタテュルクの偉業とすることで、あたかも一夜にして成ったかのような扱いとなり、共和国体制の正当化を表す事例の一つとして神話化されたとしている。

第三章(濱崎)では、音楽にまつわる動向について述べられている。新国家を創設するに当たって、体制側は共同体を表象する音楽を求め、「西洋音楽+トルコ民俗音楽」の図式をとった「トルコ国民音楽」を生み出した。しかし、こうした音楽は「トルコ現代音楽」というジャンルに留まり、体制側の意に沿う形にはならなかった。その一方で、「トルコ国民音楽」を作るために「民衆詩/民謡」の五線譜上での記録が行われたことで、雑多な「民衆詩/民謡」に「合唱で行う」「模範的な楽器演奏方法」などのルール化が見られるようになった。こうして生まれた「トルコ民俗音楽」が図らずして国民統合に貢献したとしている。

第四章(川本)では、共和国初期、アンカラで行われた式典の特徴とその変容について述べられている。1919年のケマルの入市儀礼では、オスマン朝期イスタンブルでの帯剣式に似た(宗教性が含まれる)形式が採られていたことを指摘する。独立戦争期の式典では議事堂が主な舞台となり、軍事色の強いものだったとする。続く共和国制に成った後の式典では、中心は依然として議事堂であったものの、入市儀礼時のように、ケマルが行進するのではなく、市民集団の行進を議事堂のバルコニーから眺めるという主体・客体の転換があったことを指摘する。1930年代後半になると、従来が行進等よりもスタジアムでの大規模集會に重きが置かれ²⁾、現在までの潮流になったとしている。

第五章(上野)では、宗教教育政策の変遷について述べられている。建国時の世俗化政策の結果、1930年代末までに公教育内での宗教教育は完全撤廃されたものの、徐々に不満が顕在化していった。政府は道德教育という形で対応したが効果は得られなかった。これを受け、当時、国家は宗教に関与しないという態度を取っていたため、民間に宗教教育を委ねようとした。しかし、反動勢力の温床になることを危惧して、完全委託はできなかった。1945年、複数政党制に移行することになると、共和人民党(政権)は支持獲得のため、1948年には公教育での宗教教育が行われるようになった。そのロジックとして、国家による宗教関与の態度を変え、国家が宗教を管理するという考え方にシフトさせたことを指摘している。

第六章(田中)では、トルコ人のアナトリア進出以前の文化遺産にまつわる文化政策について述べられている。共和国初期には第一章で論じられた「トルコ史テーゼ」に則って文化遺産所有の正当性を血縁的に主張すると同時に国民形成に役立てた。テーゼが衰退すると、「青きアナトリア」主義と呼ばれる文学運動と結びつき、トルコ/トルコ人は土地的に歴史を受け継ぐ存在であると規定することで、引き続き文化遺産と国家とのつながりを主張し、そのロジックが現在の文化遺産政策の根底にもなっていることを指摘する。また、現在の文化遺産に関する諸問題(開発と遺跡保存、世界遺産との関係性、イスラーム化以後の文化遺産、など)についても触れている。

第七章(柿崎)では、刑務所内の極左勢力やクルド人政治犯が抗議手段として用いてきたハンガーストライキ(ハンスト)について述べられている。ハンストは世界的に見られる抗議手段であるが、トルコの特徴として「死への断食」と呼ばれる死をも想定に入れて行う点にあるとする。1980年代からトルコでのハンストは本格化し、体制側から妥協を引き出せることもあれば、犠牲の割には殆ど効果が無い場合もあった。こうしたハンストから、トルコの刑務所は政治犯の活動拠点にもなりうるということ、トルコという現在の体制に挑戦する存在が社会に内包されていることが分かったと指摘する。

第八章(沖)では、トルコの国境線確定にまつわる諸問題が国際法の観点から述べられている。まずセーブル条約とローザンヌ条約について概観し、ローザンヌ条約での国境についての取り決めが簡潔であったこ

2) ただし、ケマルの葬儀では従来が行われた。

とから、その後の領土問題の火種になったことを確認する。そして、モスル、アレクサンドレッタ(ハタイ)での交渉を事例に挙げ、トルコが交渉において用いたロジックは必ずしも国際法に則ったものではなく、地元住民の帰属意識がどちらにあるかを重視すべきだと主張した点が特徴的であるとしている。また、第二次世界大戦後のイラク、シリア、ギリシアとの領土問題についても概観している。その上で現在に至るトルコの国境はローザンヌ条約締結によって成ったのではなく、その後の交渉の積み重ねによるものであると結論付けている。

第九章(今井)では、トルコの移民・難民政策について、①移民送り出し国としてのトルコ、②移民の「トランジット国」としてのトルコ、③移民および難民受け入れ国としてのトルコ、④シリア内戦による難民流入、の4つの観点から述べられている。①に関しては、1960～70年代にかけて、西欧に労働力として渡った事例について概観している。こうしたトルコ人は、後に帰国する者もいれば、移民として定住し世代を重ねる者もある。②に関しては、情勢不安定になった国からやってきたヨーロッパを目指す人々について概観している。近年では、ヨーロッパ出身のISのシンパなどがトルコ経由で中東へ向かう「逆トランジット」現象が見られた点やヨーロッパの移民締め出しの傾向から、トランジット国家としての役割が下火になっている点も指摘している。③は当初、トルコ系が大半であったが、シリア内戦勃発後、④が圧倒的になったと指摘する。

第十章(山尾)では、イラク(人)から見たトルコ像を、世論調査を用いて分析している。世論調査(統計)の結果を、民族や宗派の観点から見ると、シーア派やクルド人はトルコに否定的な見方をする傾向がみられた。しかし、トルコ在住の親戚の有無や政策志向によっても左右されるため単純化はできないと指摘する。また、地理的要因で見ると、トルコの介入を受けている地域では消極的なイメージが現れたのに対し、直接的に受けていない地域では好意的なイメージになる傾向がみられた。このように、様々な要因が絡まってトルコ像が可変的に生成されると結論付けている。

終章(今井)では、序章でことわりがあったように、過去5年(2013～2018年)のトルコ政治の概観が、例外的に配置されている。

以上、本書の内容を概観したが、次に本書の意義について考えてみたい。評者が考える本書の意義は大きく2点ある。

1点目は、バラエティ豊かな論考が、簡潔にまとまった状態で収録されている点である。序章で述べられている通り、各論考はこれまでの研究成果に触れる導入として最適化されている。また、本書における各論考のテーマの多様性は、序章で筆者(小笠原)が引用した粕谷元の言葉「建国以来きわめて強権的に国民統合を推し進め、極端なトルコ民族主義を打ち出してきた歴史を持つトルコだけに、実際研究材料には事欠かない」(p.9)をまさに体现していると言える。

2点目は、どの論考においても「現在」が意識されている点である。序章でことわりがあるように、本書は終章を除いて、トルコの現状を直接的に論じるのではなく、「過去」を論じることで「現在」を見つめなおすことを目的にしている。その謳い文句に偽りはなく、第一部の共和国初期の時代にまつわる論考でさえ、その論考(問題)がいかに「現在」と地続きになっているか事例を交えつつ示されている。副題である「アタテュルクとエルドアンのはざまで」も、この点においては適切であると感じられる。

その一方で気になった点も3点挙げておきたい。

1点目は、序章と各論考との関連性に関する点である。序章では、①「権威主義的な政治体制・政治文化」と②「オスマン帝国からの政治的・社会的連続性」という2つの研究潮流に触れているが、これらがどの程度、本書の各論考に踏まえられているの分かりづらい。それに伴って本書の統一感も損なわれている印象を与えかねない。①には第一章、第二章、第三章、第五章、第七章が、②には第四章が顕著に該当している(踏まえられて論じられている)というのが評者の読後認識であるが釈然とはしない。本書の終章としてトルコ政治の現状が概観されているが、それに加えて、各論考の研究潮流との位置づけについて簡潔に述べられた章があっても良かったと評者は考える。

2点目は、副題に関する点である。先に触れた通り、本書の副題は「アタテュルクとエルドアンのはざまで」である。しかし、論考のラインナップのバランスを見ると果たして、この副題は適当であったのだら

うかという疑問が浮かぶ。特に第二部を見ると、その疑問は増幅される。本書の構成として時系列的な関係になっているのは、第一部と第二部である。第二部は、第一部のアタテュルク時代の国家／国民創成を受けて、それがどのように変容したかを見るものである。その焦点は概ね 1940～50 年代に向けられており、その後に関しては簡潔にしか触れられていない。唯一、第七章は、「その後」が中心だが、第五、第六章とは違い、反体制派に焦点が当てられており、国家／国民創成の変容をそこから見出すのは難しい。言うまでもなく、1940～50 年代に変容したものがそのまま固定され、現在のエルドアン政権下まで続いている、あるいは現政権によって急激に変えられようとしているわけではない。その「変容」後にもさらなる変容があるはずである。副題を尊重するなら、その「はざま」を丁寧に追っていくべきだろう。特に、1980 年代に力を持った「トルコ＝イスラーム総合論」はトルコにおける国家／国民形成を語るにあたって欠かせない要素であり、第一章や第五章で若干の言及がなされているものの、やはり 1 章分はそれにまつわる論考があるべきだったと考える。

3 点目は、本書の第一部に通底する考え方についてである。第一部は概ね『想像の共同体』[アンダーソン 2007] で論じられるような、「体制が国家／国民のかたちに影響を与える」という立場をとっているが、逆のベクトルは無いのかと考えることも重要であろう。すなわち、「人々が体制側に影響を与える」という考え方である³⁾。本書においては、第二部の第五章や第七章がそれに近い形を取っている。しかし、これでは、国家創成期には体制側が一方的に影響を与え、時を経ると、人々側からのベクトルも生じるというやや単純な図式になってしまう。第一部にも「人々が体制側に影響を与える」という視点で論じられた論考があればより双方向的な議論ができただろう。

本書は「過去」を中心とした論考集であるが、今一度、トルコの国家／国民のかたちの現状に目を向けてみると、グローバル化が、その言葉が陳腐に聞こえる程度に進んでおり、それに伴って外との関係性において見ていく必要性が増している。例えば、第六章(文化遺産)に関連した内容で見ると、現在、トルコは TİKA (トルコ国際協力調整庁) と呼ばれる国際支援組織を使って、オスマン朝期の文化財を積極的に修復している。これは単なる国際支援の枠組みだけで見るのではなく、「自分たちの文化遺産」の認識範囲を、国境を越えて広げている行為であると読み取ることも可能であろう。また、第六章中でも言及されていたユネスコの世界遺産との関係性を考察するには、「外との関係性」的な発想が必要である。このように国家／国民のかたちを見る際に、いわゆる一国的(内的)な考え方だけでは追いつかなくなりつつある現在であるが、トルコという国の現状そして今後を見据えるにはまず、来し方を確認することが不可欠である。こうした観点において、本書は現代トルコの理解を深めるにあたって有益な書であると言え、隣接する地域との比較を試みる読者や現代トルコの幅広い領域について関心を持つ学生にとっての多様な角度からの入門書となろう。広く一読を勧めたい。

<参考文献>

- アンダーソン、ベネディクト 2007『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳) 書籍工房早山。
- アーモンド、A・ガブリエル、シドニー・ヴァーバ 1974『現代市民の政治文化——五カ国における政治的態度と民主主義』(石川一雄・薄井秀二・中野実・岡沢憲実・深谷満雄・木村修三・山崎隆志・神野勝弘・片岡寛光訳) 勁草書房。

TİKA 公式サイト <<https://www.tika.gov.tr/tr>> (2019 年 4 月 26 日閲覧)

「トルコ至宝展」公式サイト <<https://turkey2019.exhn.jp/>> (2019 年 4 月 26 日閲覧)

(佐々木 啓介 東京大学大学院人文社会系研究科)

3) 「人々が体制側に影響を与える」という考え方を理論的に考察した古典(『想像の共同体』に比するような論考)として、例えば『現代市民の政治文化』[アーモンド、ヴァーバ 1974] が挙げられる。